2022年度（令和４年度）全国学力・学習状況調査の結果分析（小学国語）

学校名　久木小学校

調査結果の概要及び教科の課題等（○良かった点や特徴ある点等　●課題や改善点等）

結果の概要	設問14問中、全国の平均正答率を上回ったのは８問、下回ったのは６問であった。学習指導要領の「言語の特徴や使い方に関する事項」「我が国の言語文化に関する事項」「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の５つの内容にわたっての出題で、そのうち「読むこと」についての内容では、14の全設問中、対象問題数４題全てで全国の平均正答率を上回った。特に「登場人物の相互関係について、描写を基に捉える」と「人物像や物語の全体像を具体的に想像する」の２つについては、全国の平均正答率を10%以上上回り、何れも80%を超える高い正答率であった。「書くこと」については対象問題数２題のうちいずれも１%程度ではあるが、全国の平均正答率を下回った。また、「話すこと・聞くこと」については対象問題数２つのうち１つは全国平均の正答率を上回り、90%近くの正答率であったが、「互いの立場や意図を明確にしながら計画的に話し合い、自分の考えをまとめる」では全国平均の正答率を４%近く下回り、正答率も43%と低かった。「言語の特徴や使い方に関する事項」は、対象問題数が５つあったがそのうちの３つが全国平均の正答率をやや上回っていた。 最後に「我が国の言語文化に関する事項」では、対象問題数は１つであったが、全国平均の正答率を若干下回った。
言葉の特徴や使い方に関する事項	○「話し言葉と書き言葉との違いを理解する」および「言葉には、相手とのつながりをつくる働きがあることを捉える」の設問の正答率はそれぞれ88%、72%と高く、また全国の平均正答率よりも４パーセントほど高かった。 ●漢字の使い方については、３題中１題のみ全国平均正答率を上回った。下回った２題については、神奈川県の平均正答率より１題は上回り、１題は平均と同じであった。ただ、３題とも無回答率が他の問題よりも高い傾向にあった。粘り強く最後まで問題に取り組む姿勢を培っていきたい。
話すこと・聞くこと	○「必要なことを質問し、話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことの中心を捉える」という設問では、全国平均正答率が84.7%に対し、本校の正答率は88.9%と高かった。一方で、「互いの立場や意図を明確にしながら計画的に話し合い、自分の考えをまとめる」設問では、正答率が50%を下回った。さらに、全国平均の正答率よりも若干下回っていた。学習指導要領では、「対話的な学び」が重視されるため、国語だけでなく様々な教科・領域でスピーチやディベート、プレゼンテーション等の活動を取り入れていくことが必要である。
書くこと	●「文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章の良いところを見つける」の設問では、神奈川県の平均正答率よりは上回ったが、全国の平均正答率と比べると若干下回った。また、この設問は記述式ということもあり、正答率は30%台であった。また、無回答率も全国や神奈川県の無回答率よりは低かったが、11.1%と高い割合であった。記述式の解答に慣れていないか、苦手意識をもっている児童が多いようである。設問に対し、粘り強く考える力を育成するとともに、作文や感想文など、「書く」学習に力を入れていきたい。

読むこと	○「読むこと」に関する設問は４題出題されたが、全て全国平均正答率よりも５％～12％ほど上回り、また、いずれも 70％～80％以上の高い正答率であった。特に「登場人物の行動や気持ちなどについて、叙述を基に捉える」と「登場人物の相互関係について、描写を基に捉える」の設問では、80％以上の児童が正答し、全国の平均正答率と比べても 10％以上上回った。資料の文章を正確に読み込み、何について、どのように書かれているのかについて正しく掴むことができていた。また、「人物像や物語の全体像を具体的に想像する」の設問は、記述式であったが正答率は 73.1％と全国平均正答率を上回っていた。一方で無回答率は、全国平均よりは下回ったが、それでも 8.3％と高い割合であった。
児童質問紙 国語に関する質問 問 49～52 国 1・国 2	「国語の勉強は好きですか」の質問では、「当てはまる」、「どちらかといえば、当てはまる」と回答をした児童を併せると 59.3％であり、全国の割合と比較するとほぼ同率である。しかし、「国語の勉強は大切だと思うか」と「国語の授業の内容はよく分かるか」の質問では、全国平均正答率よりもやや上回っていた。 一方、「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思うか」の質問では、いずれも 88％と高い割合であったが、全国の割合よりも若干低かった。児童は、国語の勉強が「好き」ということと「社会で役に立つ」ということとは切り離して捉えているようである。 また、「今回の国語の問題では、解答を文章で書く問題があり、それらの問題について、どのように解答したか」という質問は、「全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した」と回答した児童は、全国の割合よりやや低かったものの 77.8％が努力したと答えた。また、「書く問題で解答しなかったり、解答を書くことを途中で諦めたりしたものがあった」と「書く問題は全く解答しなかった」答えた児童の割合は、全国の割合より少なかった。特に「書く問題は全く解答しなかった」と回答した児童はゼロであった。しかし、実際には、無回答率が高いものがあり、問題をしっかりと理解し、最後まで諦めず取り組む粘り強さが求められる。 解答時間 45 分については、「時間が余った」と「ちょうどよかった」を合わせた割合は 66％弱で、全国の平均の割合よりも高かった。

2022年度（令和４年度）全国学力・学習状況調査の結果分析（小学算数）

学校名　久木小学校

調査結果の概要及び教科の課題等（○良かった点や特徴ある点等　●課題や改善点等）

結果の概要	設問16問中、全国の平均正答率を上回ったのは９問、下回ったのは７問であった。いずれも学習指導要領の「数と計算」「図形」「測定」「変化と関係」「データの活用」の５領域のうち「測定」を除く４領域からの出題であったが、「データの活用」以外の３領域で全国の平均正答率を若干上回った。次に、無回答率に注目してみると、設問16問中半分の６問で、全国平均の値を上回った。無回答６問のうち、選択式が４問であった。また、記述式の設問は４問出題されたが、うち３問は全国の平均正答率を下回っており、記述式への答え方も今後しっかりと身に付けさせていくことが大切である。また、分からない問題であっても諦めずに最後まで解く粘り強さを養う必要がある。
数と計算	○「1050×4の計算」及び「14と21の最小公倍数を求める」設問は、各々93.5%、77.8%の高い正答率でどちらも全国の平均正答率を上回った。「85×21 の答えが1470より必ず大きくなることを判断するための数の処理の仕方を選ぶ」設問では、全国平均の正答率より５％上回ったが、正答率は40%を切っており、半数以上の児童が理解できていない。 ●「カップケーキ７個分の値段を、1470÷3で求めることができるわけを書く」。すなわち「示された場面を解釈し、除法で求めることができる理由を記述する」設問では、全国の平均正答率より5%程度低かったが、正答率は72.2%と比較的高かった。また、この設問については、無回答率も全国平均の5.2%、神奈川県平均の6.3%と比べ、1.9%と低かった。
図形	○「辺の長さや角の大きさに着目し、ひし形をかくことができるプログラムを選ぶ」設問では、74.1%の児童が理解できており、全国の平均正答率よりも７％以上上回った。また、「示されたプログラムでかくことができる図形を選ぶ」設問も 60%近くの児童が理解できており、こちらも全国平均正答率をやや上回った。しかし、どちらの設問も、無回答率が5.6%あり、全国平均を上回っている。 ●「示されたプログラムについて、正三角形をかくことができる正しいプログラムに書き直す」設問では、本校の正答率は、全国平均正答率よりやや下回り、しかも、48.1%と半数以下の児童しか理解できていない。また、無回答率も7.4%と全設問の中で一番割合が大きかった。問題形式が記述式ではあったものの全国平均の無回答率を倍近く上回っている。設問がやや複雑になると正答率が大きく下がってしまう傾向が見られた。今後の指導法の工夫が必要である。
変化と関係	○「百分率で示された割合を分数で表すことができる」設問では、基本の問いなので、84.3%の児童が理解できており、全国平均正答率よりも13%以上上回っていた。また、無回答率も0.9%と全国平均の3.9%と比べ低い値であった。 ●「果汁が含まれている飲み物の量を半分にしたときの、果汁の割合について正しいものを選ぶ」設問では、全国平均正答率よりも若干上回っていたが、正答率は23.1%と全設問の中で最も低い正答率であった。「数量が変わっても割合は変わらない」ということを約四分の一程度の児童しか理解できていない。

データの活用	○「分類整理されたデータを基に、目的に応じてデータの特徴を捉え考察できる」設問では、67.6%以上の児童が理解できており、全国平均正答率よりも４パーセント近く上回った。しかし、無回答率は 3.7%と高く、これは全国平均の無回答率と比べ２倍以上の値である。今後の指導上の課題である。 ●「１年生と６年生が希望する遊びの割合を調べるためのグラフを選び、そのグラフから割合が一番大きい遊びを選ぶ」設問では、目的に応じて円グラフを選択し、必要な情報を読み取ることができるかを見る内容であるが、正答率は 61.1%で全国平均正答率 66.8%よりも 7.7%も低かった。また、無回答率も 3.7%と全国平均より高い数値であった。データの比較についての学習は今後重点的に指導を行う必要がある。
児童質問紙 算数に関する質問 問 53～60 算１・算２	「算数の勉強は好きか」という質問に対して、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答した割合は合わせて 54.6%で、全国平均の 62.5%及び神奈川県平均の 63.1%より 10%弱下回った結果となった。しかし、「算数の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思うか」という設問には、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答した割合は 94.5%と全国平均よりやや上回っていた。算数の授業においても、積極的に主体的で対話的な学びを取り入れ、児童の実生活と関連づけながら、一層児童が興味・関心をもって算数の授業に取り組むことができるよう、指導の工夫をしていきたい。 一方、「算数の問題の解き方が分からないときは、あきらめずにいろいろな方法を考えるか」という設問には、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答した割合は併せて 76.9%であったが、全国平均よりは若干下回った。また、「算数の授業で問題を解くとき、もっと簡単に解く方法がないか考えるか」という設問には、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答した割合は併せて 67.6%で、全国平均の 76.8%より 10%近くも下回っている。決まった公式を、決まった方法で使い、解くことも大切であるが、計算や文章題など、自分なりに工夫して解く方法を考え、発表する学習も多く取り入れていく必要がある。 「今回の算数の問題では、言葉や数、式を使って、わけや求め方などを書く問題があったが、それらの問題について、どのように解答したか」という設問では、「全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した」と回答した児童は、全国の割合よりやや低かったものの 75%が努力したと答えた。また、「書く問題で解答しなかったり、解答を書くことを途中で諦めたりしたものがあった」と「書く問題は全く解答しなかった」答えた児童の割合は、全国の割合より多く、より一層最後まで諦めず取り組む粘り強さが求められる。また、そのための指導の工夫も今後必要である。 解答時間 45 分については、「時間が余った」と「ちょうどよかった」を合わせた割合は 88.9%で、全国の平均の割合 83.4%よりもやや上回った。

2022年度（令和４年度）全国学力・学習状況調査の結果分析（小学理科）

学校名　久木小学校

調査結果の概要及び教科の課題等（○良かった点や特徴ある点等　●課題や改善点等）

結果の概要	設問17問中、全国の平均正答率を上回ったのは９問、下回ったのは８問であった。領域や問題によっては大小の差はあるものの、全体として、全国平均正答率とほぼ同率であった。学習指導要領の「エネルギー」「粒子」「生命」「地球」の４領域からの出題であったが、「エネルギー」「生命」「地球」の３領域で、全国平均の正答率を上回った。特に「エネルギー」の領域では、全国平均正答率を３％近く上回った。しかし、「粒子」の領域では全国平均正答率を７％下回った。また、問題形式別にみてみると、選択式の問題は全国平均正答率よりも上回ってはいるが、短答式と記述式は全国平均正答率よりいずれも７％近く下回った。
エネルギー	○４問の出題中３問で全国平均の正答率を上回った。「実験の結果から、問題の解決に必要な情報が取り出しやすく整理された記録を選ぶ」設問では、正答率が77%以上であり、多くの児童が理解できていた。また、全国平均の正答率よりも上回っていた。「自分で発想した実験の方法と、追加された情報を基に、実験の方法を検討して、改善し、自分の考えを書く」設問でも、75%の児童が理解出来ており、実験結果から、より妥当な考えに改善できる力が身に付いているようである。 ●「実験で得た結果を、問題の視点で分析して、解釈し、自分の考えをもち、その内容を記述する」設問では、全国平均の正答率よりも６％近く低かった。また、この問いは全国平均の正答率が35%であることから、本校においては、３割弱の児童しか理解できていないことになる。問題形式が記述式ということもあるが、応用力の定着が不十分であることが伺えた。今後も応用力の育成に力を注いでいきたい。
粒子	○５問の出題中２問で全国平均の正答率を上回った。全国平均の正答率を上回った「水溶液の凍り方について、実験の結果を基に、それぞれの水溶液が凍る温度を見いだし、問題に対するまとめを選ぶ」設問と「鉄棒に付着していた水滴と氷の粒は、何が変化したものか書く」設問は、本校の正答率はそれぞれ70.4%と65.7%と高かったものの、無回答率も高かった。 ●「メスシリンダーという器具を理解しているか」という設問では、正しく理解している児童は38.9%で、全国平均の正答率を30%近くも下回っており、今後は、器具の名称や使い方についての知識・理解の一層の指導が必要である。さらに、「凍った水溶液について、試してみたいことを基に、見いだされた問題を書く」設問では、本校児童の正答率は29.6%であった。全国平均の正答率も39.3%と低い値だが、それよりも９％程度下回った。記述式の問題形式であったことも正答率が低い要因ではあるが、自然の事物・現象から得た情報を、他者の気付きの視点で分析して、解釈し、自分の考えをもって、その内容を記述できる力を身に付けさせていくような取り組みを学習の中に多く入れていく必要がある。

生命	○５問の出題中４問で全国平均の正答率を上回った。特に「見出された問題を基に、観察の記録が誰のものであるかを選ぶ」設問では、93%以上の児童が正しい選択肢を選んでおり、全国平均の正答率よりもやや高かった。また、「資料を基に、カブトムシは育ち方と主な食べ物の特徴から二次元の表のどこにあてはまるのかを選ぶ」設問でも 80%以上の児童が正しく選択しており、全国平均を上回っていた。その他、昆虫の体のつくりをみる設問でも、理解している児童の割合は 77%弱おり、正しく観察する能力が身についていることが分かる。 ●「自分で行った観察で収集した情報と追加された情報を基に、問題に対するまとめを検討して、改善し、自分の考えをもち、その内容を書く」記述式の設問は 60%以上の児童が正解できていたが、全国平均と比べると６%近く下回っていた。この問いも記述式であり、記述式の解答形式が苦手と感じている児童が多いようである。普段から自分の考えをまとめたり、実験・観察結果を自分の考察を入れながら記述したりする練習を積んでいきたい。
地球	○「エネルギー」を柱とする領域、及び「粒子」を柱とする領域と重複している設問については、全国平均の正答率よりも３～４%程度上回っていた。 ●「冬の天気と気温の変化を基に、問題に対するまとめを選ぶ」設問は、観察で得た結果を問題の視点で分析して、解釈し、自分の考えをもって解く設問であるが、80%以上の児童が理解できていたが、全国平均の正答率よりは２%弱下回った。また、「観察などで得た結果を、結果からいえることの視点で分析して、解釈し、自分の考えをもつことができる」という設問は、全国平均の正答率よりも２%低かった。また、この問いは、問題形式が選択式であるにも関わらず、正答率は本校でも全国でも 50%を割っている。さらに、本校での無回答率は 10%以上あり、これは全国の無回答率 6.5%を上回った。今後も引き続き、知識の定着をしっかりと身に付けさせていく必要がある。
児童質問紙 理科に関する質問 問 61～69 理１・理２	「理科の勉強は好きですか」の質問では、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答した割合は合わせて 65%とやや低かったが、「理科の勉強は大切だと思いますか」の質問では、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答した割合は合わせて 76%で、「好き」とは言えないが、「大切である」と感じている児童は多くいるようである。また、「理科の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思うか」の質問では 68% が「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答したが、「普段の生活の中で活用できないか考えるか」の質問では、55%程度であった。児童は、現在受けている授業が普段の生活の中で役立っていることは感じにくいが、将来的には役立つことを学んでいると思っているようである。しかし、「将来、理科や科学技術に関する職業に就きたいか」という質問では、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答した割合は合わせても 30%未満であった。その一方、「観察や実験の結果から、どのようなことが分かったのか考えていますか」「自分の予想をもとに観察や実験の計画を立てていますか」と言う質問では、70%から 80%を超える児童が「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答した。今後は、児童が興味・関心をもって主体的に学ぶ工夫を積極的に授業に取り入れていくことで、理科好きな児童が増えてくることが期待できる。 また、70%以上の児童が、「解答時間は十分であった」、「全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した」と答えていた。

2022年度（令和４年度）全国学力・学習状況調査の結果分析（児童質問紙）

学校名　　久木小学校

特徴的なことや課題と考えられること等

子ども自身に関する質問で、「朝食を毎日食べているか」について、「当てはまる」と回答した児童の割合は、82.4％で、全国平均、神奈川県平均よりもやや低い割合であった。「毎日、同じくらいの時間に寝ているか」「毎日、同じくらいの時間に起きているか」についての質問では、「当てはまる」と回答した児童はそれぞれ41.7%、64.8%で、これらは全国平均、および神奈川県平均を若干上回った。また、昨年度の本校６年生と比較しても高い割合であった。基本的な生活習慣は全国的に比べたら身についているように感じるが、就寝時間がまちまちであることなどから、引き続き家庭と協力しながら改善を求めていきたい。

次に、「将来の夢や目標をもっていますか」という質問では、「当てはまる」と回答した児童は、52.8%と全国平均より７％程度低かった。しかし、「人の役に立つ人間になりたいか」という問いでは、66.7%の児童が「当てはまる」と回答しており、全国平均よりは８パーセントほど低いが、この時期の児童は、将来の目標はまだ決まっていないが、将来は何か人や社会の役に立ちたいと考える児童が比較的多いという傾向が伺えた。

学校生活に関して、「いじめは、どんなことがあってもいけないことだと思うか」という質問では、「当てはまる」「どちらかと言えば、当てはまる」と回答した児童が94.4%おり、全国平均、神奈川県平均とほぼ同等の割合であった。また、「人が困っているときは、進んで助けていますか」という質問で「当てはまる」と回答した児童は32.4%で、全国平均より７パーセントほど下回っていた。本校が願う子どもの育ちの姿の一つとして、弱者の気持ちに寄り添う、人の悲しみや苦しみを自分事として感じ、手を差し伸べてあげられる人になってほしいことから、一層、道徳教育に力を入れていきたい。

地域や社会参加に関して、「今住んでいる地域の行事に参加しているか」の質問では、「当てはまる」と回答した児童の割合は12%と、昨年度の６年生より低い値であり、かつ全国平均より10%以上下回っていた。しかし、「地域や社会をよくするために、何をすべきかを考えることがあるか」の質問では、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答した児童は48.1%おり、全国平均とほぼ同等であった。今年度も新型コロナウィルスの影響があり、なかなか地域との関わりが出来なくなっているが、地域に貢献したいと考えている児童は比較的多くいるようである。

「５年生までに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表できたか」の質問では、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答した児童の割合は72.2%と、全国平均よりも５％以上上回っていた。さらに、「話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることが出来ていると思うか」に対して、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答した児童の割合も82.4%おり、全国平均より上回っていた。本校では、昨年度より、市の委託を受け、総合的な学習の時間や生活科の授業を中心に主体的・対話的な活動を多く取り入れながら、研究を推進しており、これまでの取り組みが実を結んできたと言える。今後もより充実させながら実践を積み重ねていきたい。

また、昨年度から児童一人に一台chromebookを配布し、活用していることや、コロナ禍もあり、ICTを積極的に活用した授業を進めている。「学校で、授業中に自分で調べる場面で、ＰＣ・タブレットなどのICT機器をどの程度使用したか」の質問では、「ほぼ毎日」「週３回以上」「週１回以上」と回答した児童は併せて86.1%と全国平均よりも丁度10%上回った。また、「普段、１日当たりどれくらいの時間、ICT機器を、勉強のために使っているか」の質問でも「30分以上」と回答した児童は57.5%で全国平均43.8%よりも10%以上も上回っていた。引き続き、ICTの様々な活用を模索していきたい。

2022年度（令和４年度）全国学力・学習状況調査の結果を受けての学校としての取組

学校名　久木小学校

調査の結果を受けて、今後の指導改善に向けて学校として取り組むこと

①いじめの根絶に向けて

「いじめは、どんなことがあってもいけないことだと思うか」という質問では、5.6%の児童が、「どちらかと言えばあてはまらない」と回答しているため、今後もいじめの根絶に向け、粘り強く指導していきたい。そして、全児童が「いじめは絶対に許さない」という意識をもつようになるまで、引き続き、道徳教育の充実等を一層進め、「いのちを大切にする授業」「友だちを大切にしたり、人を思いやる気持ちをもたせたりする授業」を多く取り入れ、いじめ・暴力の未然防止や早期発見・早期解決を目指す。

②支援教育の一層の充実に向けて

今年度は２名の教育相談コーディネーターに役割を分担しながら、相談業務を行い、養護教諭や管理職、場合によっては巡回スクールカウンセラーを交えて、きめ細やかなケース会を開いている。また、定期的に校内支援委員会、支援会議を開催し、教職員全体で支援の必要な児童についての情報共有を図っている。しかしながら、児童質問紙で「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」の問いで、「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」と答えた児童の割合が 44.5%と全国平均の割合より多いことや、軽重含め、新たなケースも増加していることから、一次支援を重点的な柱とし、支援教育の一層の充実を図っていく。

③校内研究の推進に向けて

昨年度より逗子市教育員会より委託を受け、「総合的な学習の時間」「生活科」を柱に、授業の中で「主体的・対話的で深い学び」の展開を積極的に行っている。児童自ら課題を見つけ、解決しようとしたり、話し合い活動を通して、自分の考えや友だちの考えを伝え合ったりする活動を多く取り入れ、「つなげよう、未来をつくろう」の研究テーマに迫るため、研究をさらに推進する。そして、今年度は、研究発表会本発表の年度にあたるため、学校内外に一定の成果を示すことを目標に研究の充実を図る。

④地域連携の強化に向けて

今回の調査結果では、「地域や社会をよくするために、何をすべきかを考えることがあるか」の質問では、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答した児童は 48.1%であった。また「自然の中で遊ぶことや自然観察をすることがあるか」という質問で、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答した児童が 75%と、全国平均より 10%ほど上回っていることからも、児童は地域と積極的に関わることを欲しているようである。自然豊かな久木地区で、地域の方と関わりながら学校と共に児童の育成を担うことが大切であると感じた。そして、学校でも「地域に開かれた学校」、「地域と協働する教員」をスローガンに、地域との連携を一層強化していく。

⑤ICT 教育の推進に向けて

すでに児童一人ひとりに chromebook が配布され、様々な授業や行事等で活用を図っている。児童質問紙の「学校で、授業中に自分で調べる場面で、PC・タブレットなどの ICT 機器をどの程度使用したか」の質問では、「ほぼ毎日」「週３回以上」「週１回以上」と回答した児童は併せて 86.1%おり、児童の関心度は高い。しかし、新型コロナウィルス等の影響で学級や学年閉鎖になった時や、学校が休校した時に、chromebook のより効果的な活用の仕方、また家庭での学習に ICT をどう活用していくのか等については、引き続き検討していく必要がある。今後も、chromebook を使った実践事例を増やしていき、教員同士で共有を進めていく。